

令和2年度

京都府立綾部高等学校由良川キャンパス(東分校)

定時制課程

学校経営計画

(スクールマネジメントプラン)

実施段階

令和2年度 京都府立綾部高等学校(東分校定時制) 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) (実施段階)

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
学力の向上と進路希望の実現 基本的な生活習慣の確立 基本的人権を尊重する態度と豊かな人間性の育成 健康及び体力の維持向上 地域社会から信頼される学校づくりの推進	(成果) 生徒一人一人に寄り添ったきめ細かい指導の結果、休学が1名、転退学等の進路変更及び原級留置者はなく最低限に抑制することができた。 コミュニケーション力に課題があり中学校で学校に適應できなかった生徒についても、暖かい雰囲気のおかげで、多くが落ち着いて学校生活を送ることができている。 伝統文化体験(茶道)、講演会の充実を図ることにより、日頃体験することができない経験をさせることができた。 部活動員数も少なく日頃の活動時間も短い中であるが、卓球部においては、両丹総体の個人の部で優勝するなど、顕著な成績をおさめることができた。 (課題) 生徒の学習意欲は依然高いとはいえない。生徒の興味関心をさらに喚起するべく授業内容・授業形態・評価方法等を工夫する必要がある。 将来に対して前向きな展望を持ち自分自身の進路希望を明確化することが困難な生徒が多い。生徒一人ひとりに対して、継続的できめの細かいキャリア教育を実施する必要がある。 集団生活において時として社会的な未熟さが顕在化する生徒が依然として少なくない。今後とも自己肯定感や社会性を身につけさせる必要があり、そうした観点から特別活動等の積極的な運用を検討する必要がある。	A・G・P(Ayabe Global Program)の推進 <スマートスクール><探究活動><地域発信><連携事業> 4S+S運動の推進 <整理><整頓><清潔><習慣> + <スマイル> 業務のスリム化 生徒一人一人の個性や背景に寄り添った指導体制の確立

分掌・教科	項目(重点目標)	具体的方策及び数値目標	評価	成果と課題
1 組織運営	・生徒の実態に応じた教育を、効果的に実践できる体制を構築する。	授業内容、授業形態等の工夫を促進するため、授業見学及び授業評価を複数回実施する。	C	・授業見学は随時、授業評価は複数回実施したが、教職員の資質・能力の向上につながる新しい取組を実施することができなかった。 ・日々の連絡会や教育支援会議等で生徒の課題を全職員が共通認識し、統一した指導を実施することができた。
		本校の教育課題に対応した教育実践をするため、分掌・学年・教科間の連携会議を毎月実施する。	B	
		生徒の実態把握、わかる授業を実践するため、情報の電子化と共有を進める。	B	
2 教務部	・授業改善に努め学力の向上を図る。	校務システムを効果的に運用し、教務関係文書を正確に作成する。	B	・校務システムと連絡会を活用して、毎日の生徒の状態を把握することができた。 ・過年度追認が必要な生徒に対して、長期休暇の間に補習を行い、休学者を除く全員が進級、卒業することができた。
		教科担当・学級担任に教務関連情報を確実に伝達し、誤解や意思の不統一が生じないようにする。	B	
		補習などを効果的にを行い、生徒個々の学力を向上させることにより、全員を卒業進級させる。	B	
3 生徒指導部	・安心安全な学校づくりを行う。 ・個々の発達段階に応じた指導を行う。	問題事象に俊敏に対応し、各部・関連機関と連携し丁寧な指導を行う。	B	・安心安全な学校作りを目指し、各教員・各分掌と連携し情報共有・対処が行えた。 ・生活・学習上で不安定な要素を抱える生徒もいるので、今後も注意して見守っていきたい。
		問題事象の芽を摘む予防活動をいっそう推進し問題事象0を目指す。	B	
		各関係機関と連携して交通安全教室、非行防止学習、法律講座などを適切に実施する。	B	
4 進路指導部	・希望進路の実現に向けて、生徒の状況に応じた指導を行う。	学年に応じた進路学習を計画的に実施し、進路意識を高める。	C	・進路学習においては、新型コロナの影響で学校見学や企業見学が実施できず、3学期の外部講師による進路講演会のみ実施できた。 ・4年生の希望進路実現を図るために、担任と連携したきめ細やかな指導ができた。
		4年生個々の進路希望に合わせた支援を丁寧に行い、希望進路の実現を目指す。	B	
		進路希望の具体化が困難な生徒に対して、関係機関と連携しながら丁寧な支援を行う。	B	
5 保健部	・心身ともに健康的な学校生活を送らせる。 ・自身の健康について興味を持たせる。	生徒の健康診断の受診率を90%以上にする。	B	・薬物乱用防止学習講演会を実施した。 ・感染症予防のため、登校時の検温とマスクの着用を徹底した。 ・生活習慣の確立と自己の健康管理に対する意識を高められるような取り組みが出来なかった。
		感染症対策のために、始業前の検温と健康観察を徹底する。	A	
		「保健だより」を月1回発行する。	A	

分掌・教科	項目(重点目標)	具体的方策	評価	成果と課題
6 人権 教育部	・差別意識の解消に向けた学習を行い、生徒に人権意識を根付かせる。 ・奨学金制度の周知徹底を行い、進学や就職に際しての金銭的な不安の解消に役立てる。	人権意識を養うため、講演等の人権学習を年に2回実施する。	A	B ・人権学習を4回行うことができた。 ・各人権学習終了後、会議等で意見交換を行い今後の人権学習を充実させるための情報を得ることができた。 ・学校HPに奨学金情報を掲載するなど、生徒への周知徹底に努めた。その結果、奨学金希望者全員が奨学金を受け取ることができた。
		人権学習の充実に役立てるため、人権学習を行った際には教員へのアンケート調査を毎回行う。	B	
		各学年部と連携のもと、生徒への奨学金制度の周知徹底に努め、希望者には適切な支援を行う。	B	
7 第1 学年部	・健全な生活習慣を確立させる。 ・生徒一人ひとりの様子を把握し、きめの細かい学習指導を行う。 ・家庭や学校での豊かな交流により社会性を身につけ、人間性を育成する。	自己を大切に、他者を認め合うクラス作りをすすめる。	B	B ・黒板消しやストーブの点火・消火は確実に生徒自身ができるようになった。 ・多くの学校行事を通じて、生徒間の交流を深めようと思ったが、クラス内での会話が弾まず、次年度以降の課題である。
		毎日の健康状態を確認し、お互いが安全で安心した学校生活を送る。	A	
		定期的に面談を行い、生徒の状態を把握し、自立に向けた生活習慣・進路指導を適宜実施する。	B	
8 第2 学年部	・生徒それぞれの状況を把握し、生活・学習面において自らを律して行動ができるように指導を行う。	挨拶を始めとする毎日の対話を通して、生徒の状況を把握する。	B	B ・各教科、分掌担当者間で生徒の最新の状況について情報共有することができ、日常の生活指導が的確に行えた。 ・進路目標を明確にさせながら、学習した内容をきちんと日常生活や家庭学習に結びつけられるよう、これまで以上に各教科での予習や宿題に取り組みせたい。
		教科担当等の教員と連携を密にとり、必要に応じて生活・学習支援を行う。	B	
		面談を通して、自立に向けた生活習慣・進路指導を適宜実施する。	B	
9 第3 学年部	・生徒の学習状況、生活状況を把握し適切な指導を行う。 ・各々の生徒が将来に向けて展望が持てるようにきめ細やかな進路指導を行う。	教科担当等の教員と連携を密にとり、必要に応じて生活・学習支援を行う。	C	B ・一部生徒に対して学習指導、生徒指導の両面で指導をすることはあったが、クラス全体は落ち着いた雰囲気中学校生活を送ることができた。 ・来年度は各自進路を決定するので、進路部との連携を密にし、希望の進路に近づけることを目標とする。
		生徒の現状把握のため、日常の挨拶を毎日行うなど積極的な交流を行う。	B	
		日常生活の振り返りを通じ、自己との対話を行わせ、主体的なキャリア形成を行えるよう指導する。	B	
10 第4 学年部	・生徒全員の卒業および希望進路の実現を目指す。 ・生徒一人ひとりの学習状況や生活状況を把握し、きめ細かな指導を行う。	生徒との個人面談を月に1回以上行い、進路指導に役立てる。	B	B ・毎月、面談を行い得た情報を進路指導に役立てることができた。 ・登校時などの声かけを通じて生徒との交流を行い、得た情報を職員間で共有することができた。 ・連絡を入れることはできた。しかし、一度、無断欠席について注意をした後も無断欠席をすることがあった。
		生徒との交流を積極的に言い、得られた情報を職員間で共有する。	B	
		無断欠席があった際には、欠席ごとに家庭もしくは本人に連絡を入れる。	B	
11 国語科	・社会生活において必要な国語について、その特質を理解させ適切に使用できるよう指導する。 ・言語活動を行い、銘銘の伝え合う力を高め思考力や想像力を育成する。	漢字の小テストを週に1回行う。	B	B ・漢字の小テストを週に1回実施することができた。今後は語彙力の向上が課題である。 ・毎回の授業で、生徒自身が学んだこと・感じたこと・疑問に思ったことを言語化する時間を確保することができた。 ・使用する教材に合わせて種々の視聴覚教材を使用することができた。今後は、生徒の表現ツールとしてのICTの活用が課題である。
		毎回の授業で、生徒が学んだことを振り返ることができる時間を確保する。	B	
		使用する教材に合わせてパワーポイントなどの視聴覚教材を用いる。	B	
12 地歴 公民科	・地歴・公民の基本的な事項を理解し、知識として定着させる。 ・社会に出た時に必要な知識や能力、特に自分の意見や考えを持ち、それを相手にわかりやすく伝える能力を身に付けさせる。	生徒が興味関心を持つ教材を精選する。	B	B ・単元ごとにプリントを作成し、生徒の興味と理解がすすむように心がけた。 ・3学期からは、地理を中心にパワーポイントを利用した授業ができるようになり、多くの資料・地図を用いることができたようになった。
		視聴覚教材や授業プリントを活用し、知識の定着を図る。	A	
		リアルタイムのニュースを教材化し、社会への関心を持たせる。	B	
13 数学科	・数学における基本的な概念や原理・法則の理解と処理能力の向上を目指す。	要点を絞り、生徒がわかったと実感できるような授業を目指す。	B	B ・教材の内容を日常生活と結びつけることにより、生徒の興味や関心を喚起することができた。 ・演習の時間を十分に確保し、進度の遅い生徒には個別に指導することで、きめの細かい指導を行うことができた。
		基本問題の演習の時間を確保する。	B	
		各学年の授業において、四則計算や文字式など基本事項の定着を目指す。	B	
14 理科	・身近な事柄から理科に対する興味を持たせ、社会生活に必要な科学的知識・能力を身につける。	演示実験や持ち込み教材・ICTを、2～3時間に1回程度の割合で持ち込み興味を持たせる。	B	B ・ICT教材により、授業時間が減少しても効率良く対応することが出来た。 ・持ち込み教材の利用・日常生活・ニュースなどとの関連付けも順調に行う事が出来た。 ・理科に苦手意識を持つ生徒がまだまだ払拭できていない。
		自然や日常的な事柄と学習内容を関連させ、知識の定着と利用方法を伝える。	B	
		理科において必要な計算・知識について、プリント・講義・ICT映像で繰り返し指導し定着を図る。	A	

分掌・教科	項目(重点目標)	具体的方策	評価	成果と課題
15 保健体育科	・保健、体育の授業を通して、生徒が心身ともに健康的に日々の生活を過ごすことができるための授業を展開する。また、生涯スポーツの観点から、多くの項目を通して卒業後もスポーツに積極的に触れ合う姿勢を育成する。	授業始めに体育館ランニング2往復と体操、ストレッチ(柔軟体操含む)を行う。	B	・全学年において授業始めに毎時間の準備体操を行えることができた。 ・コロナ禍の折ではあったが感染防止対策を徹底した上で、今年も全学年において数多くの多様な種目に触れさせることができた。
		それぞれのスポーツへの知識や理解、興味を育成するため、全ての種目でプリントの資料を作成し、確認テスト、及び実技テストもおこなう。	B	
		多くのスポーツに触れ合う機会を持たせるため、1年間で7種目以上の生涯スポーツを行う。	B	
16 英語科	・日常生活の中に英語があふれていることに気づかせて、身近に使われていることを実感させ、自分で学ぶことができる力を育成する。	生徒に関心を持たせ、理解を深めるために、ICT教材を使って授業を行う。	B	・ICT教材や音楽教材を使って授業を行うことができた。 ・フレーズや文法を使って、自分のことについて、短い文を作成させ、主体的に取り組む態度を育成した。 ・プリントをまとめたり、単語テストによって、理解を深めることができた。
		生徒に授業内容を整理させ、理解を深めさせるため、毎時間ノートを回収し点検する。	B	
		生徒に知識を定着させるため、全学年、毎時間、授業中に単語テストを実施する。	B	
17 芸術科	・基礎技術を充実させ、自ら表現する意欲を育てる。	授業規律を大切にする。	B	・創作に対する姿勢に個人差があり、意欲がない生徒に対する指導については十分な成果が上がらなかった。 ・集中して取り組んだ生徒の作品の中には、完成度の高いものが見られた。
		授業時間を有効に活用し、完成度を高める姿勢を身につけさせる。	B	
		基礎から高度な内容まで表現できる幅を広げさせるため、技術差のある生徒が取り組める課題を取り入れる。	B	
18 家庭科	・自立する力を育成する。	身近な事柄を教材として選び、生徒の興味・関心を引き出すよう工夫する。	B	・身近な問題を取り上げることで、生徒の意識を高めることができた。 ・実習など体験的な学習に積極的に取り組ませることができた。
		体験的な学習課題を多く設定する。	B	
19 情報科	・現代社会における必須アイテムであるパーソナルコンピュータの操作に習熟させる。	タッチメソッドを習得させるため、タイプレスソフトによる反復練習を行う。	B	・情報モラル・セキュリティ教育を体系的に行うことができた。 ・生徒が安全かつ有効に情報機器を活用できるよう、今後も繰り返し指導していく必要がある。
		文書入力量を重視して評価し、欠席しないで取り組む生徒を評価する。	B	

学校関係者 評価委員会 による評価	<p>・全般的によく挨拶してくれるし、自転車通学のマナーでも住民に気を遣う部分も見られ、生徒たちの心の優しさが見られる。</p> <p>・コロナ禍に振り回され、振り返りようのない1年であった。過去の常識が非常識になる時代であり、数年前の最新が古くなる時代となった。さらに家庭で過ごす時間も増えてきた。不透明なことも多いため、学校、家庭、社会が連携して教育を進めていく必要がある。</p> <p>・コロナ禍であることがかえってICT機器の整備が進み、ICTを活用した授業改善や業務改善につなげることができた。令和4年度からのBYOD(全員タブレット購入)を見据えた研究を進めていく。</p> <p>・綾部市では幼児期から就学支援体制を確立し、取り組んでいる。育児や教育に不安を抱えている家庭も多く、支援を行っている。高校でも中学校までの支援についてさらに連携を図り、成人に至るまでの一貫した指導と支援をとも行ってもらいたい。</p>
-------------------------	---

次年度に 向けた改善 の方向性	<p>(成果)</p> <p>スマートスクール環境が整備され、各教科でICT機器を活用し、生徒に興味関心を喚起させる効果的な授業展開が徐々にではあるが実施できている。コミュニケーション力に課題があり中学校で学校に適応できなかった生徒についても、暖かい雰囲気の中、落ち着いて学校生活を送ることができている。</p> <p>伝統文化体験(華道)、講演会の充実を図ることにより、日頃体験することができない経験をさせることができた。</p> <p>両丹総体においては、卓球男子個人の部で2年連続優勝を果たした。また、生徒生活体験発表大会においては、本校で初となる最優秀賞に次ぐ、優秀賞第一席(京都市教育長賞)を受賞するなど、顕著な成績をおさめることができた。</p> <p>(課題)</p> <p>集団生活において時として社会的な未熟さが顕在化する生徒が依然として少なくない。今後とも自己肯定感や社会性を身につけさせる必要があり、そうした観点から特別活動等の積極的な運用を検討する必要がある。</p> <p>特別な支援が必要な生徒の指導が適切にできるために、教職員研修や教職員間の意思疎通を充実させ、教職員一人ひとりの指導力や知識を向上させるとともに、外部機関とも適切に連携をとりながら、指導や支援にあたる必要がある。</p>
-----------------------	---